

# 「島津義久」 没後四百年を迎えて



島津義久の墓所(国分中央二丁目金剛寺跡) 市指定文化財

## 一、島津家と義久

今年(2011年)は島津家第十六代当主「島津義久」が没して四百年目を迎えます。

義久は天文二(一五三三)年に島津家第十五代当主貴久の長男として生まれました。若いころから戦いに明け暮れ、父貴久や弟の義弘・歳久・家久らと九州全土を平定する一歩手前までできましたが、豊臣秀吉の九州討伐により、九州統一の夢は破れました。その際、義久は剃髪して「龍伯」と名乗りました。

## 二、富隈城・舞鶴城築城

その後、隼人町富隈に富隈城を築いて十年近く住み、その間に隼人の浜之市港の整備や琉球との交易を奨めました。慶長五(一六〇〇)年、関ヶ原の戦いで日本の趨勢(徳川体制)が決まると、これからは戦いの時代ではなく経済の時代と判断して、慶長九(一六〇四)年国分の麓(現在の国分小学校)に舞鶴城を築き、城下町を基盤の目的のような整然とした街並みに整備しました。義久は慶長十六(一六一一)年に亡くなるまでこの舞鶴城で暮らします。

国分の街はこの舞鶴城と街並みを基軸に政治・経済・文化の中心として発展してきました。

## 三、島津義久の顔

義久の人となりを表すのに三つの顔を持つていたといわれています。

- 一、武将としての顔
- 二、経済人としての顔
- 三、文人としての顔

まず、武将としての顔ですが、島津家中興の祖といわれた父「貴久」の後継ぎ、弟の義弘らと力を合わせて一時期は九州全土を支配する勢いの最強の薩摩軍団をつくりました。特に義久が武将としてその力を発揮したのが、「秀吉の九州討伐」と「関ヶ原の戦い」の戦後処理です。本来なら島津家は滅ぼされてもおかしくない状況でしたが、義久の巧みな外交手腕によってその危機を脱しました。戦国武将として名をはせた大名家のほとんどが滅ぼされたことを考えると義久の働きがいかに大きかったかということがわかりま

す。

次に、経済人としての顔です。義久は舞鶴城に移り住んだ二年後の慶長十

一(一六〇六)年、藩士服部宗重に本格的に「たばこ」の栽培を命じます。国分の梅木(現在の舞鶴中学校付近)に栽培したのが始まりで、これが「国分たばこ」として全国に名をはせ、おはら節の一節にもなりました。また、琉球や中国との交易を積極的に進めました。現在でも「唐人町」の地名や郷土芸能「琉球人踊り」、義久が出した朱印状(琉球渡航の際に必要な許可証、市指定文化財)が残っています。

最後は文人としての顔です。義久は当時の武将としては珍しく、数多くの和歌・連歌を残しています。「世の中の米と水とをくみつくし つくしてのちは天つ大空」は義久の悔いのない生涯を詠った辞世の句ですが、実は「いろは歌」も残しています。いろは歌といえは義久の祖父島津忠良(日新公)のいろは歌が知られています。義久のいろは歌も道義的なもの、神仏を敬

うもの、武士としての心掛けを詠ったものなどがあり、忠良が作ったいろは歌と比べても優劣をつけ難いほどです。

## 四、島津義久とは

このように義久は数々の偉業を成した武将でしたが、歴代の当主に比べて大変地味に見えます。

忠良は竹田神社(加世田市)、貴久は松原神社(鹿児島市)、義弘は徳重神社(伊集院町)とそれぞれ本人を祀った神社があり、またいずれも肖像画が伝えられています。ところが義久を祀った神社はなく、肖像画も残されていません。

逆にこの点にこそ、義久の偉大さがあつたのではないのでしょうか。華々しい行為は人間誰もが欲しますが、義久はあえて求めず、ことごとく他人に譲り、そして、誰もが欲しないことを進んで自ら背負ったのでした。いわゆる「他人に花を持たせる」ことを常に心掛け、己は「泥をかぶる」ことをいとわず、しかし重要な要は、きちんと押さえる。

このように、義久は当時の武将としては稀有な知識人であり、先見の明があり、勇猛果敢な「将」たる人物でした。私たちのまちは、この偉大な人物によって江戸時代以降の発展の基礎を成し、現在に至っているのです。

(文責 鈴)